

ガラテヤ人への手紙 5 章をお開き下さい。いよいよ第 3 番目にして最後の箇所となりました。ファイナルセクションです。アウトラインを思い出して下さい。このガラテヤ人への手紙は 3 つに区分されます。3 分割されます。最初のセクションは 1 章 2 章です。それはパウロの恵みの個人的体験をまとめていて、そして 2 番目のセクションが 3 章 4 章です。それはパウロの恵みの教理的説明をまとめております。そして今日見る第 3 番目にして最後のセクション、それは 5 章 6 章です。パウロの恵みの実践的適用という部分です。具体的に今まで教わったこと、学んできたことを自分の身に当てはめる。自分たちの生活、信仰生活に、教会生活に、奉仕生活に当てはめるということです。

早速 1 節から見て行きたいと思います。『キリストは、自由を得させるために、私たちに解放してくださいました。ですから、あなたがたは、しっかり立って、またと奴隷のくびきを負わせられないようにしなさい。』4 章 30 節のところにも奴隷の女の子どもと、自由の女の子どもというところが比較されておりました。イエス・キリストは奴隷のくびき、つまり律法の縄目から私たちを解放して下さいました。それは恵みによる救いというものであります。私たちはイエス・キリストを信じる信仰によって、その律法の奴隷のくびきから自由の子ども、神の子どもとされました。そして興味深いことにパウロはこの「奴隷のくびき」という言葉、これはエルサレム教会会議においてペテロが使った言葉をそのまま借用しております。使徒の働き 15 章 10～11 節に「割礼を受けなければ救われないのではないか。皆異邦人もユダヤ人と同じように割礼を受けなければ救われないし、割礼を受けなければ神様から霊的祝福を受けられないんだ。」と、そのような割礼派の人たち、またはユダヤ主義者、律法主義者という人たちが現れて、教会の中で問題が起こったわけです。そしてその問題を議論するために教会で初めての会議が開かれました。それがエルサレム会議、若しくはエルサレム公会議というものです。その中でペテロが弁明しているわけです。『¹⁰ それなのに、なぜ、今あなたがたは、私たちの父祖たちも私たちも負いきれなかつたくびきを、あの弟子たちの首に掛けて、神を試みようとするのです。』ここで「私たちも負いきれなかつたくびき」とペテロが使っている言葉、それがパウロによって「奴隷のくびき」として使われております。それはすなわち、律法の行ないによらなければ救われない。行為義認の教理です。そして 11 節で『¹¹ 私たちが主イエスの恵みによって救われたことを私たちは信じますが、あの人たちもそうなのです。』律法の行ないによってではなくて、主イエスの恵みによって救われたんだと。だから私たちはもう奴隷じゃない。もう解放された自由人であると。ペテロがかつてエルサレム公会議で述べたその陳述をそのままパウロも借用して使っております。このペテロとパウロの関係についてはガラテヤ人への手紙の中でも見ましたけれども、2 章のところでそのペテロでさえ割礼派の人たち、多数派の人たちについておもんねってしまって、妥協してしまって、そしてペテロだけでなく、パウロの同労者のバルナバまでも引きずり込まれてしまったところを、パウロが公然と非難しておりましたが、だからと言ってパウロはペテロのことを嫌っていたわけでもありませんし、また蔑んでいたわけでもありません。ペテロの使った言葉を重んじて、そしてそれをまたユダヤ主義者たちに語っているわけです。ユダヤ主義者たちはエルサレムに在住していましたので、エルサレム教会の重鎮であるペテロの言葉には、どうしても逆らえないわけでありました。そのような知恵も神様から与えられて、パウロは敢えてここでペテロの言葉を使って、またと奴隷のくびきを負わせられないようにしなさいと述べています。割礼を受けてユダヤ人にならなければ救われないとか、律法の行ないを守り行なわなければ霊的になれないという考えは、現代の教会にも染み付いてしまっております。洗礼を受けなければ救われないとか。または洗礼を受けるためには、洗礼準備の勉強会に出席しなければ、それを修了しなければ洗礼を受けられないとか。または、うちの教団の方式でバプテスマを受けなければ、そのバプテスマは正式とは認められない。もう一度受け直さなければ、あなたは聖餐式にも与れないし、また教会員にもなれないし、そして奉仕も出来ないんだと。それはすべて割礼派のメンタリティであります。それをパウロは「奴隷のくびき」と言っています。律法の規定、儀式、ルール、掟、決まりごと、そうしたものをすべて守らなければ救われない。スピリチュアルになれない。霊的クリスチャンになれない。そのような奴隷状態から、枷からイエス・キリストは私たちを贖い出して

下さったわけです。パウロの時代では、それはユダヤ主義とか、律法主義と呼ばれておりましたけれども、それはまさに行為義認の教えです。頑張らなければ、良い行いを積まなければ救われない。神様に認めてもらえない。神様からの承認を頂けない、祝福を頂けない。それはまさに奴隷状態であります。

そして 1 節のところで「**しっかり立ちなさい**」という言葉が使われております。ガラテヤの人たちはふらふらしていたわけです。つまり倒れた者もありますし、またふらふらとあちこちに道を外してしまった者たちもあったわけです。1 章 6 節に『私は、キリストの恵みをもってあなたがたを召してくださったその方を、あなたがたがそんなにも急に見捨てて、ほかの福音に移って行くのに驚いています。』

また 3 章 1 節にも『**ああ愚かなガラテヤ人。十字架につけられたイエス・キリストが、あなたがたの目の前に、あんなにはっきり示されたのに、だれがあなたがたを迷わせたのですか。**』

さらに 4 章 9 節。『ところが、今では神を知っているのに、いや、むしろ神に知られているのに、どうしてあの無力、無価値の幼稚な教えに(これは律法主義の教えです。)逆戻りして、再び新たにその奴隷になろうとすることですか。』このようにガラテヤ人たちはコロコロ変わってしまう人たち、気まぐれな人たち、所謂気分屋さんです。ユリアス・シーザーもそのようにかつてガラテヤ人のことを評しました。非常に移ろいやすい性格で、いい加減でコロコロ変わるので、ガラテヤ人たちは信用ならないと、シーザー(カイザル)が言ったわけです。その特徴は的を射ているわけです。パウロもその点をしっかりと指摘しております。律法と恵みの間を行ったり来たり。そのようにふらふらするんじゃないくて、しっかりと恵みの上に立つように。若しくは恵みの下にとどまるように。ローマ人への手紙では、パウロは「**恵みの下にとどまるように。**」と言っています。ここでは恵みの上にしっかりと立ちなさいと、パウロは言っています。行為義認と信仰義認の間をふらふらと行ったり来たりさまようわけです。若しくは、肉と御霊の間をふらふらと、肉の行いに奔ってみたり、御霊の力を受けて御霊に働いて頂く聖霊体験をしたり。アップダウンが激しいわけです。不安定なわけです。落ち着かないわけです。「あれをしなければ、これをしなければ」と懸命に奔走し、それらが出来ているうちは安定しているわけです。正確には、達成感に満足してしまっている。これが出来た、あれが出来た、私は出来る人、という自己満足に陥っているわけです。しかし、一度あれが出来なかった、これも出来なかった、ということになりますと今度は自己嫌悪に陥るわけです。自己満足から今度は自己嫌悪、激しいアップダウンを繰り返すわけです。出来るクリスチャンと出来ないクリスチャンの間を行ったり来たりアップダウンして、そして不安定になってしまうわけです。それがガラテヤ人の特徴だったわけです。そんな彼らに対してパウロは、「**あなたがたはしっかりと立ちなさい。恵みの上に、恵みの側に、恵みの下にしっかりととどまるように。そこにポジションを置くように。そこに根を下ろすように。**」

そして 2~4 節をお読みします。『²よく聞いてください。このパウロがあなたがたに言います。もし、あなたがたが割礼を受けるなら、キリストは、あなたがたにとって、何の益もないのです。³ 割礼を受けるすべての人に、私は再びあかしします。その人は律法の全体を行う義務があります。⁴ 律法によって義と認められようとしているあなたがたは、キリストから離れ、恵みから落ちてしまったのです。』律法によって救われようとする、義と認められるようとする律法主義者の人たち、ユダヤ主義者の人たちと、恵みによって救われる、恵みによって義と認められる、それは信仰義認と言います。恵みによって信仰を通して救われる。そのふたつは相容れないわけです。全く別個の救いというものです。同じ救いを説くわけですが、救いの方法が全く異なり、そして救いの勿論結果というものも全く異なるわけです。2 節のところに「**キリストは、あなたがたにとって、何の益もない**」とパウロは言っていますけれども、行いというものは恵みを締め出すものです。恵みの反対語は行いです。ですから私たちが肉の行いに奔れば、必ず私たちは自らを恵みから外すこととなります。「**恵みから落ちてしまう**」と 4 節には言われております。そして肉の行いは恵みを締め出すということですから、キリストの行ないを不要とするわけです。肉の行いは、キリストのあの十字架の上での贖いの行ない、これを不要とするわけです。律法主義者たちの言うことは「イエス・キリストを信じることは大切です。それは必要です。それは良いことです。でもそれだけでは不十分ですよ。」と。信仰プラス〇〇、××と。聖書プラス〇〇、××というふうに律法主義の人たちは言います。そしてそれはカルトの特徴でもあります。「**キリストは、あ**

あなたがたにとって、何の益もない」という部分を宗教改革者のジャン・カルバンはこのようにコメントしております。「キリストを半分しか持とうとしない者は、キリストを完全に失ってしまう。」と。彼らは「イエス・キリストを信じること、それは救いには必要だ。でも信じるだけでは足りない。割礼を受けなければ救われない。割礼を受けなければちゃんとしたクリスチャンになれない。霊的なスピリチュアルな敬虔なクリスチャンにはなれない。」と、行いを強調するわけです。そして、その行ないがなければダメだと言うわけです。でもイエス・キリストは私たちの救いのためにすべてのことを十字架の上で成し遂げて下さいました。ですからイエスは十字架の上で「完了した。」と宣言されたわけです。これについて律法主義者たちは、「いやそれは完了したのではなくて、まだ完了していない。未完了だ。」と言うわけです。勿論そんなふうには彼らは口にはしませんけれども、実質イエス・キリストだけでは足りないと言っている人たちは、イエスが十字架上でおっしゃられた「完了した。」という言葉を否定しているわけです。「それは完了ではなくて、未完了だ。」と。不完全だったと言うわけです。つまり「イエス・キリストの十字架の死というのは無駄死にだった。」と彼らは言っているわけです。それは全くの無益な死であったと。そのように律法主義者たちは、イエス・キリストのあの尊い十字架の贖いの死を台無しにしてしまうわけです。そして、それはカルトも同じであります。イエス・キリストの十字架の死だけでは不十分だったので、文鮮明がその足りていない部分を補うようにして、再臨のメシアとしてイエス・キリストから直接頼まれたと。文鮮明こそが救いを完成させる真のメシアであると。カルトはそのようにイエス・キリストだけでは不十分である。聖書だけでは不十分であると、説くわけです。

もう一度 3、4 節の方にも目を留めて頂きたいと思います。『³割礼を受けるすべての人に、私は再びあかしします。その人は律法の全体を行う義務があります。⁴律法によって義と認められようとしているあなたがたは、キリストから離れ、恵みから落ちてしまったのです。』律法の行ないによって、若しくは肉の行いによって義と認められるようとする者たち、神の祝福を得ようとする者たちは、特徴としまして律法の全体ではなくて一部を限定的に守ろうとします。そのような傾向があるということも知って頂きたいと思います。もし彼らが割礼を受けなければ救われないと言うならば、彼らは割礼以外の律法の規定のすべても守り行なわなければ救われないはずなんです。確かに律法のすべてを守り行うことさえ出来れば人は救われるわけです。でもそれは私たちには到底出来ないということをパウロは主張しましたし、それはパウロに言われるまでもなく私たちは経験的にそれを知っております。義人はいない、ひとりもないんです。でも律法主義の人たちは、全体じゃなくてその一部分だけを守り行えば良いと、勝手なことを言うわけです。ある人たちは、土曜日が安息日だから安息日に礼拝をしなければいけない。土曜日に礼拝すべきだと。日曜日に礼拝する人たちは、それは太陽の神を拝む(日曜というのは SUNDAY です。それは太陽神を拝む)日に合わせて礼拝をしているんだから、それは偶像礼拝である。それは獣の刻印を受けた人たちの悪魔の礼拝であると。そのように説く人たちもおります。土曜日に礼拝する教会だけが真の教会であって、そのグループに属さなければ救われないと。それは過激の根本主義のセブンスデー・アドベンチストという人たちの主張であります。でも実際のところサタデーという土曜日は、サターン(土星)の神です。ですから太陽神に礼拝を捧げる日曜日と彼らが主張してしまえば、土曜日に礼拝を捧げるサタデーはやはり問題となってしまいますし、また安息日だけを守るということでは済まされないはずであります。他にも律法には規定が沢山あります。安息日の規定だけ 1 つとっても沢山あるわけです。一切の労働は禁じられております。安息日には限られた距離しか移動出来ません。安息日の道のりというものがあります。ですからもしセブンスデー・アドベンチストの教会が自分の住んでいる所から安息日の道のりをオーバーするようであれば、それは律法違反です。しかも安息日には火を作ってははいけないわけです。火を焚いてはいけないんです。大抵の車は火を焚くわけです。ですからそれは労働にあたります。そうすると歩いて行かなければいけないわけです。また前日までですべて土曜日の食事は作り終えておかなければいけないわけです。沢山規定があるわけです。

また血を食べてはならないという律法の規定を強調して「輸血はしてはいけない。輸血は血を食べることになるから、輸血は禁止である。」とそのように説くグループもあります。皆さんもよく知っている“エホバの証人”であります。でも血を食べてはならないということと言うならば、それをすべてに当てはめなければいけません。その辺のスーパ

一のお肉は買えません。全部血抜きをしなければいけませんし、また他の食物規定も守らなければいけません。豚肉も食べてはいけませんし、うなぎも食べてはいけません。シーフードも結構食べられませんので大変なことになると思います。

ですからひとつの律法だけを守り行なおうとするならば、必ず全体を守り行なわなければ律法の行ないによっては義と認められないにもかかわらず、彼らは全体を守ろうとせず一部の律法だけを守ることにこだわりを持つわけです。それはあまりにも偏っております。あまりにもナンセンスな話であります。例えばあなたがスピード違反で捕まったとします。警察官があなたのところにやってきて「運転免許証を見せて下さい。」と言って、そして〇キロオーバーですということを言われます。そして罰金を課せられるわけですがけれども、でもあなたは反論します。「私を捕まえないで下さい。私を違反者にしないで下さい。私を犯罪者にしないで下さい。私は銀行強盗なんか今までにしたこともないですし、人なんか殺してもいません。善良な市民です。スピード違反ぐらいで私を違反者にしないで下さい。」銀行強盗をしないからといって、また人殺しをしないからといって、違反者にならないとは言えないわけです。たった1つの小さなそれこそ駐車違反でも、一時停止違反でも、たった1つのルールを破るならば、法律を破るならば、あなたは立派な違反者、犯罪者とされてしまうわけです。1つの法律を破るだけであなたは立派な犯罪者であるわけです。1つの律法を破ればあなたは立派な違反者、犯罪者となってしまいます。

ヤコブ 2:10~11 も参照したいと思います。『¹⁰ 律法全体を守っても、一つの点でつまずくなら、その人はすべてを犯した者となったのです。¹¹ なぜなら、「姦淫してはならない」と言われた方は、「殺してはならない」とも言われたからです。そこで、姦淫しなくても人殺しをすれば、あなたは律法の違反者となったのです。』「私はそんな悪い人間じゃありません。」と、あなたは言うかもしれません。「私は不倫なんかしたことないですから。」でも人殺しはどうでしょうか。兄弟に向かって腹を立てる者は人殺しであります。またいくら結婚相手以外の異性と寝たことはないと言ったとしても、そういう性的関係を持ったことがないとあなたが言ったところで、心の中で女を情欲の目で見たとすれば、若しくは男を情欲の目で見たとすれば、もう既に姦淫の罪を心の中で犯したとイエスは言われております。ですから律法の行ないによっては誰も義と認められないことは明らかであります。日頃いくら良い行い、善行を積み重ねていても、たった1つの失敗で、過ちで、罪で1発で失格となるわけです。1発であなたは違反者です。1発であなたは罪人です。それこそたった1つの罪で今まで積み重ねてきた、積み上げてきたすべての功績、それは無駄になります。だから律法の行ないによって義と認められるようにするその試みというのは、実に虚しいということです。実に馬鹿らしいナンセンスなものであるということです。それに対してパウロは「愚かなガラテヤ人」と呼びかけて、「こんな愚かな考えに染まってはいけません。あなた方は恵みによって信じるだけで救われたじゃないか。どうして再び行いによらなければ救われないかのような、行いによらなければ神に認めてもらえない、祝福を受けられないかのような、そんな無益な無駄な馬鹿らしい教えに逆戻りするの。」と主張してきたわけであります。

今度は 5 節に目を移して下さい。『**私たちは、信仰により、御霊によって、義をいただく望みを熱心に抱いているのです。**』信仰により、御霊によりと。律法の行ないによるものではありません。肉の行いによるものではありません。信仰により、これは恵みによりと言っても差し支えないです。言い換えても構いません。それによって“**義をいただく望み**”です。希望を私たちは熱心に抱いていると。

ローマ 8:23~25 のところに“**義をいただく望み**”とは何なのかということが具体的に書いてあります。『²³ そればかりでなく、御霊の初穂をいただいている私たち自身も、心の中でうめきながら、子にさせていただくこと、すなわち、私たちのからだの贖われることを待ち望んでいます。(からだ贖われるのです。霊、魂が贖われるだけじゃなくて、私たちの肉体をも贖ってください。これが救いであります。救いは全人的な救いです。心の中だけが救われるのではないのです。物理的にも救われるということです。)²⁴ **私たちは、この望みによって(この希望によって)救われているのです。目に見える望みは、望みではありません。だれでも目で見ていることを、どうしてさらに望むでしょう。**²⁵ もしまだ見ていないものを望んでいるのなら、私たちは、忍耐をもって熱心に待ちます。』イエス・キリストを信じた瞬間に私たちは誰もが神の前に義と認められます。神の子どもとされる特権に与ります。これは前回も見たように、同時に

私たちは神の相続人となる。イエス・キリストが神から受け継いでいるもの、それらすべてが私たちにも受け継がれていく。キリストと共同相続人となるということ。このローマ 8 章にも書いてあります。

そして実は救いの中にはそれだけではなくて、今も私たちは救われ続けております。栄光から栄光へとイエス・キリストと同じ姿に、似た者に段階的にではありますけれども、徐々にではありますけれども、だんだんありのままの自分からキリストに似る自分へと変えられているわけでありまして。私たちのセルフイメージは罪によって完全に崩壊し、そして歪んでしまっていたわけですから。汚れきってしまったわけですから。でも私たちはイエス・キリストによって救われたので、そのセルフイメージはキリストイメージへと。本来の姿です。人間は神のかたちに似せて造られたのです。それぞれにセルフイメージという人間のかたちがあるのではありません。人間はすべて共通して全員が全員神のかたちに本来似せて造られているんです。ですからその神のかたちとは、すなわち人となられた神、イエス・キリストのかたちを指していますから、誰もがキリストのかたちに似れば似るほど満足するわけですから。本来造られた目的に沿って生きようになりますから、それこそが幸福なわけですから。それこそが満足なわけですから。イエス・キリストから離れて自分のイメージを良くしよう、自分のセルフイメージを向上させよう。そのような試みはいつかは破綻します。肉はそれを好みます。自分がよく見られたい。自分がカッコイイ人、出来る人、素晴らしい人、親切な人、偉い人と、そのように思われたい。それはセルフイメージの向上を目指す人の目標であります。でも残念ながら真の満足はそこから得られません。自分以上に素晴らしい人もいっぱいいますし、結局は自分を信じたって自分に失望することがあるわけですから。自分自身に裏切られることもあるわけですから。自分の限界を知って虚しさを覚えるわけでありまして。でももし私たちがキリストのイメージに変えられていくなれば、それには無限の可能性が広がります。今まで出来なかったことも出来るようになります。生来生まれつき持っていなかったものも超自然的に与えられていきます。人生は 180 度変えられます。全く違う新しい自分へと変えられるわけですから。第二コリント 5:17 にもあるように、キリスト・イエスにあって私たちは新しく造られた者です。もう古い自分をいじくのではないのです。古い自分を修復して改善してセルフイメージを向上させるのではなくて、全く新しいイメージです。キリストイメージという全く新しいかたちを私たちは頂いて、そのかたちに徐々に、段階的に似るように今されている。それが今現在も救われ続けているという意味であります。

そして、それに加えて将来的には私たちは完全に見た目もイエス・キリストと同じ姿に変えられると。それがここで言われている“望み”です。希望というものです。信仰により御霊により義をいただく望み。この“義をいただく望み”とは、からだが贖われる。キリストと同じからだ、すなわちイエスが死から復活されたあの栄光のからだ、新しいからだ、不滅のからだと同じからだ、罪を犯すことのないからだへ。病気になることのない、死ぬことのないからだへと私たちは変えられるわけですから。そしてそれはいつ起こるかという、携挙の時に起こります。第一コリント 15 章にもそれは瞬間に起こると。一瞬にしてとあります。まばたきの瞬間に瞬時に朽ちるものが朽ちないものへと変えられる。一瞬にして変えられるの“変えられる”という言葉は生物学用語の「変態」であります。いやらしいエッチな人に変わるその「変態」ではありません。芋虫が蝶に変態するように、やごからトンボに変態するように、オタマジャクシからカエルに変態するように、それは全くまるで別個のものに変えられるような。土の中に生きていたものが空を飛んでしまうわけですから。凄いことですから。言うことしか知らなかったものが、自由に空を駆け巡るわけですから。凄いことですから。そういうことが自然界で起きているのに、私たちは自分の体がそのように変えられることはにわかに信じ難いと言うわけですから。携挙なんか、にわかに信じ難い。なのに虫に起こる変態とか、下等生物に起こる変態は信じるわけですから。「そんなの普通ですよ。当たり前ですよ。」動物や虫に起こることを私たちは当たり前と思っているわけですからけれども、人間がそのように変態すること、これは聖書に書かれていることですから。このことが必ず私たちの身にも起こる。それが私たちの希望です。もう罪を犯さなくて良いんです。もう病気にならなくていい、障害を持たなくていい、死ぬことのないからだ、キリストと同じからだに変えられる。素晴らしい希望です。これを私たちは自助努力によって勝ち取るのではないのです。律法の行ないによってそこに到達するのではないのです。ただ信じるだけでいいんです。それは御霊なる主の働きであると言われております。栄光から栄光へと私たちは主と同じかたちに変えられていく。それは御霊なる主の働きである、聖霊の働きであると。

他にも**第一ヨハネ 3:3**にもこう書いてあります。『**キリストに対するこの望みをいただく者はみな、キリストが清くあられるように、自分を清くします。**』その望みというのは前節を見て頂くと**2節**に『**愛する者たち。私たちは、今すでに神の子どもです。後の状態はまだ明らかにされていません。しかし、キリストが現れたなら(携挙の時です。携挙時に私たちはイエス・キリストと顔と顔を合わせます。)、私たちはキリストに似た者となることがわかっています。なぜならそのとき、私たちはキリストのありのままの姿を見るからです。**』キリストに対するこの望みをいただく者は、キリストが清くあられるように、自分を清くします。もう私たちのゴールは分かっています。キリストと同じ姿に変えられることが人生のゴールです。ですからそのゴールに向かって私たちは栄光から栄光へとキリストの似姿に徐々に変えられている。それを神学用語で説明しますと、まずイエス・キリストを信じた段階で私たちは罪無きものとして認められる、義と宣言される。それを義認と言います。信仰義認、信じるだけで義と認められる。そして今現在私たちはキリストの似姿に徐々にではありますけれども変えられつつあるわけです。5年前よりも今の方がキリストの似姿に近づいてきた。それは聖化と言います。清められていく、聖化。そして将来私たちが完全に見た目も物理的に罪を犯すことのない死ぬことのない体に変えられる。それを栄化と言います。栄光の体に瞬時に変えられること。ですから救いには過去の側面、現在の側面、そして未来の側面。そしてそれは全人的な救いというふうにも言えるわけです。ただ心が軽くなるため、気休めのような救いがもたらされたものではありません。完全なる救いが私たちにもたらされました。それを私たちは信仰により御霊によりこの**義をいただく望み**を常に熱心に願い求めているところであります。

テキストに戻って頂いて、**ガラテヤ 5章 6節**です。『**キリスト・イエスにあっては、割礼を受ける受けないは大事なことでなく、愛によって働く信仰だけが大事なのです。**』詳訳聖書では『**ただ愛によって活動的になる信仰だけ**』とあります。そもそも信仰というものには必ずアクションが伴います。信仰には必ず働き、行いが伴うわけです。行いのない信仰は死んだものだと言っています。本物の信仰ならば必ず生きているのでそれなりの働き、行い、アクションが伴うということです。生きていればこそです。死んだ信仰には行いはありません。「この部屋に時限爆弾が仕掛けられています。あと 30 秒で爆発します。」と私が言ったとします。そして皆さんがその言葉を「ああそうですか。信じます。」そして 10 秒経っても 20 秒経っても座ったままであるならば、多分あなたのその信仰は本物の信仰ではないです。本当に信じている者はその瞬間できるだけ遠くへと、できるだけ安全なところへとまず逃げるという行動に出ると思います。若しくは他の逃げ足の遅い人たち、体の不自由な人たちを助けるために動こうとします。安全を確保するためにわずかな時間でもすぐに知恵を絞って行動に出ると思います。でも行動しない人たちは、それを信じていないわけです。

第一コリント 13章 2節もお読みしたいと思います。『**また、たとえ私が預言の賜物を持っており、またあらゆる奥義とあらゆる知識とに通じ、また、山を動かすほどの完全な信仰を持っていても、愛がないなら、何の値うちもありません。**』と。クリスチャンになってから信仰歴が 20 年 30 年 40 年 50 年、いくら信仰歴を重ねても愛がないならその信仰歴には何の値うちもありません。神学校を卒業しようと愛がないなら、その神学校で得た信仰は何の値うちもありません。律法の行ないによって義と認められようとする律法主義には、この愛がありません。彼らには信仰はあります。むしろ端から見れば彼らの信仰は立派に見えると思います。割礼を受けなければ救われない。律法の行ないによって自らを清め、自らを律し、そして品行方正で誰の目にも立派な人というふうには彼らは見えるわけですから、彼らの信仰は実に立派だと褒められると思います。でも彼らには愛がありません。律法主義の特徴、そこには愛がないということです。日曜日に教会に行かなければいけない。礼拝を遵守しなければならぬ、厳守しなければいけない。そのように説くことも実際にそれは悪いことを説いているわけではないわけです。日曜日に教会に行って礼拝を捧げること自体は決して悪いことではありません。それはむしろ良いことです。でも律法主義者はそれだけで満足してしまうわけです。日曜日に礼拝プログラムをこなせば、それで礼拝した気になってそれで充分だ、それで満足する。そこで止まってしまうことが多いわけです。

でも恵みによって救われている人たちは、何もしないのではなくてむしろそれ以上のことをやってのけてしまうわけです。日曜日に教会に来て礼拝を捧げなければいけない、日曜礼拝遵守、厳守ということと言われなくても押し付

けられなくても、彼らは喜んで日曜日に教会にやってきました。そして日曜日だけ礼拝してそれで充分だとは彼らは思いません。この教会には平日も聖書の学びがあるんですか？それは嬉しいです。いつですか？水曜日にあります。では水曜日にも来ます。いや実は金曜日もあるんです。じゃあ、金曜日にも行きたいです。金曜日には2回もあるんです。午後と夜もあります。恵みによって救われた者たちは、その神の恵みに感動し圧倒されていますので、どれだけ神様に良くして頂いているのか、どれだけ神様から愛されているのか。そのことをもう体験してしまっていますから、その神をもっと知りたい。その神にもっと近づきたい。もっと神の恵みに浴びたいと願うようになりますから、律法主義的にただ日曜日だけ礼拝を守ればそれで良いとか、日曜日礼拝を守っている限りは私は良いクリスチャンであるというようなしみつられた考え方はしないわけです。むしろもっと自由に、人から強要されなくても、強制されなくても、言われなくても自ら進んで「もっとしたいです。」と。

「十分の一献金、しなければいけません。」確かに聖書には収入の10分の1、10%を神に捧げるように。むしろそれは主のものなので献金でなくて返金であると聖書にはあります。この10分の1を返金しないものは神から盗んでいる、大泥棒だと**マラキ書**には書いてあります。だから10分の1献金をしなければいけないんだと、律法主義的に説くことも出来ます。そして、そのこと自体は決して悪いことではないですけれども、ただ10分の1さえ捧げていれば「それで私はもう献金したんだ。立派に私は信仰生活を全うしているんだ。10分の1献金しているから。」と。

でも恵みによって救われた者たちは10分の1だけでは物足りず、10分の2だろうと、10分の3だろうとそれ以上捧げたい。別にそういうことを誰かから強要されてもいないわけです。もっとしたい、もっと捧げたい、もっと行きたい、もっと働きたい。愛によって働く信仰とは、そういうものです。

「10キロの私の重い靴を運びなさい。」と言われれば、皆さんは「嫌だなあ、そんな重いもの運びたくないなあ。」と思うかもしれません。でも「10キロの我が子を背負って歩きなさい。」と言われればどうでしょうか。愛しているならば重いものでも軽く感じるわけです。律法主義よりも恵みはもっとよく働きます。律法主義はそもそも言われないとやらないものです。奴隷根性です。奴隷根性には限界があります。言われたことだけやればそれで良いと思っているからです。言われたことさえやっていたら、自分はOKだと思っているわけです。最低限のことしかしません。それが律法主義です。でも恵みによって救われた者は、愛によって働く信仰を持っています。彼らはどれだけ神様から愛されているのか、味わっているものです。ですからその愛に対して応答したいと願うものです。応答すること、英語ではレスポンスであります。でも律法主義はそれを責任と思って、レスポンシビリティと捉えます。レスポンシビリティ（責任）とレスポンス（応答）は大違いであります。私たちは応答するものです。神の愛に答えるものです。律法主義はただ言われたことだけをやれば、それで私は良い子であると。良いクリスチャンであると。そのように自己満足し、そのように人からも思われたい。そういう人たちはそれ以上のことをしないということです。ですからいくらパウロが律法主義を否定したところで、パウロはだからといって恵みは何もしないのではないんだと。むしろ逆だと。恵みはもっとするんだと。ある人たちは教会でいろいろと奉仕の枷をかけられて「あなたは教会員として、当番としてこれをしてしなければいけない。あれをしなければいけない。」いろんなことを命じられたり、いろんなプレッシャーをかけられて「あなたがしなければ他の人が迷惑するんです。」とか、「あなたはもう信仰を持って何年にもなるんだから、もっとしなさいいけない。」とか、いろんなことを言われて、「あなたにはこういう資格があるんだから、こういう経験があるんだから、こういうタレントがあるんだから、賜物があるんだから。」と言われて、いろんなことをやらされて、そしてその結果疲れしまって、もう教会に行くのが苦痛である。まさにそれは律法主義です。もう限界を感じてしまうわけです。

でも恵みによって救われ、恵みによって信仰生活、若しくは教会生活を送っている人たちは、自ら進んで喜びを持って神様の愛に答えるべく身を捧げようとします。見た目は滅私奉公に見えるかもしれませんが。でもそれは決して奴隷根性から行っているのではないのです。それは自由な気持ちで、キリストにある自由を満喫しているから。「こんな私でも神様に用いて頂けるなら、どうぞお使い下さい。あなたが私に与えて下さったものはあまりにも素晴らしいので、あまりにも沢山あるので、少しでも私はあなたにお返ししたいのです。あなたにお応えしたいのです。」神の愛に対して応えたいと。神に良くして頂いたことに対して私も良いことをしたい。これだけ沢山の恵みを頂いているんだ

から、この恵みを1人でも多くの人に分かち合いたい。そういうことを私たちは信仰によって御霊によって示されるわけです。そして自然に動くようになります。自然に奉仕をするようになります。自然に捧げ物をするようになります。それが本来の健全なクリスチャンライフというものです。

そしてガラテヤ5章7節に今度は移って行きたいと思います。『あなたがたはよく走っていたのに、だれがあなたがたを妨げて、真理に従わなくさせたのですか。』ガラテヤ人たちはよく走っていたとパウロは認めています。2章2節でパウロは自分もまた走っていたと言っております。『それは、私が力を尽くしていま走っていること、またすでに走ったことが、むだにならないためでした。』と、パウロも自分の信仰生活を走ること、スポーツにたとえています。勿論その走るという行為は強要されてではありません。義を頂く望みがもう待っているの、栄冠がそこに待っているの、それを自分のものとするために自ら進んで志願して走っているわけです。オリンピックで金メダルを目指す人たちは、誰かに言われないと練習しないでしょうか。陸上競技か何かで毎日毎日何キロ走りなさいとか、トレーニングしなさいとか、そういうことをいちいち命令されなくても、人から言われなくても、彼らは自分でどうしても金メダルが欲しいと思えば、どんな苦しいトレーニングでも自らに課しながら、そして積極的に練習に励むものであります。強制されてではなくて自発的にです。ところがそんなガラテヤ人たちの歩みを妨げる者たちが割り込んできたわけでありませぬ。それがガラテヤの教会をかき乱す者たちと呼ばれている割礼派の人たち、ユダヤ主義者、律法主義者の人たちです。あなたがちょうど走っているところに急に割り込んで来てあなたをつまずかせるとか、あなたをコースから外れるように邪魔をする、そういう輩がここで言うところのユダヤ主義者たち、律法主義者たちのことです。今までよく走っていたのに、神の恵みのトラックコースをしっかりとまっすぐ走っていたのに、急に横から割り込んで来た者たちに邪魔されて、転ばされて、そして別のコースへと、別の方向へと誘惑されてしまったわけです。誘導されてしまったわけでありませぬ。

8節に『そのような勧めは、あなたがたを召してくださった方から出たものではありません。』そのような勧め、若しくはそのような教えは、あなたがたを召してくださった方、つまりイエス・キリストの教えではありません。この8節は鍵となる聖句です。律法主義かどうか、それが聖書的かどうか、それがカルトであるかどうか見分ける鍵となる聖句です。そのような勧めは、あなたがたを召してくださった方から、イエス・キリストから出たかどうか。もしそれがイエス・キリストから出ていないならば、それは異端です。別の言い方をすれば、そのことが聖書に書かれていないならば、それはすべて真理ではありません。間違いだということです。イエス・キリストから出たかどうか、福音書を見れば分かります。福音書においてイエス・キリストは、そのような勧めをしているのでしょうか。そのような教えを説いているのでしょうか。そのような行動をとっているのでしょうか。聖書を見れば一目瞭然です。聖書を見れば全てが分かります。他は要らないんです。聖書だけあれば充分です。その中にイエス・キリストを私たちは見出すようにして読み、学んでいるわけです。その聖書のキリストと違うことを教えているならば、それは異端です。それは律法主義であり、カルトと言っていると思います。そのようにして私たちも見分けることが出来ます。イエス・キリストが割礼を受けなければ救われないと福音書の中で説いているのであれば、その教えは承認されるわけです。イエス・キリストがバプテスマを受けなければ救われないと説いているのであれば、私たちもそうすべきなんです。でもそうでないならば私たちは、それは危険な教えとして、誤った教えとして切り捨てなければいけませんし、拒否しなければいけません。異端の人たち、律法主義者の人たちが何を言おうとも、私たちはガラテヤ5章8節に従って、あなたを召してくださった方、イエス・キリストから出たものかどうか吟味して、検証して、そして判断しなければいけません。識別しなければいけません。その方法はそんなに難しくないということです。イエス・キリストから出たかどうか、出ているかどうか。それを聖書からただ確認するだけでいいわけです。聖書以外のものは必要ありません。「聖書だけでは不十分です。このものみの塔の発行している小冊子がなければ、聖書の真理を正しく知ることは出来ませぬ。」とか、「この高価なる真珠という副読本がなければ(モルモン教の教本です。)、それがなければ救われぬ。」とか、そういうことを説くようであればそれは完全にカルトです。異端であります。もしこの教会が、「マラナサグレースフェロシッパの菊地一徳牧師が発行している小冊子がなければ聖書の真理を正しく知ることは出来ませぬ。」なんてことを説くようになれば、この教会は完全な

るカルトです。異端であります。聖書だけでいいんです。〇〇の言ったこと、××の著作だとか、そういうものは必要ないんです。聖書だけで真理を見分けることが出来ますし、そして私たちは本当に自分が正しいトラックを走っているかどうか、コースを走っているかどうか、確認することが出来ます。外れていることが分かれば、また正しい恵みのトラックに移ればいいんです。戻ればいいんです。

そして 9 節。今度は走るというスポーツのたとえから、イラストレーションから、調理・料理・クッキングのイラストレーションに変わっています。『**わずかのパン種が**(パン作りをしている人は分かると思います。)、**こねた粉の全体を発酵させるのです。**』このわずかなパン種、本当に目に見えないような小さなものです。わずかなものですが、それが粉全体を大きく膨らませてしまう。聖書において“**パン種**”というのは、常に罪の、若しくは悪の象徴です。「**パリサイ人のパン種に気を付けなさい。**」というふうにも使われています。偽りの教え、偽善的な教え、律法主義の教え。それら全てパン種というふうに表示されています。そして、それは実のところは目に見えないほど小さいもの、わずかなものです。だから注意が必要です。言い換えれば、分かりにくいということです。一見しては分からないんです。それが律法主義かどうか、すぐに分からないもの。それが律法主義のトリッキーなところと言っていいと思います。騙されやすいところということです。トリッキーというのはそういうことです。初めは律法主義というのはスタートは良いんです。律法主義の動機は正しいのです。純粋なんです。ただし、方法がまずいということです。行いによるということです。自助努力によるということです。まずいわけです。「教会のために。」動機はいいです。「兄弟姉妹の祝福のために。」素晴らしい志です。でも、その方法を間違ったら大変なことになります。律法主義の行き着くところは 2 つに 1 つです。それは自賛(self glorification)か、自責(self condemnation)かのどちらかです。自分を持ち上げ、高めて、褒め称える。「私はなんと素晴らしいのか。」自分に栄光を帰す、その自賛と、自責は自分を責めるということです。「自分は駄目クリスチャン。あの人のようには出来ていない。あの人のようには出来ない。」律法主義はそのようにして自賛か自責かですから、常にアップダウンが激しいのです。今 1 人 1 人吟味して頂きたいと思います。あなたはアップダウンの激しいクリスチャンでしょうか。感情の起伏が激しいクリスチャンもおりますけれども、でも信仰の起伏が激しい人は往々にして感情の起伏も激しいです。ある時は非常にルンルンで絶好調ですけども、急にブルーになって急に落ち込んでしまう。自賛か自責かです。いろいろとうまくいっている間は自賛なんですけれども、うまくいなくなったら自責になってしまうわけです。順調に毎日のようにデイポーションをし、そして教会の行事、プログラムに欠かさず参加して、日曜日は勿論のこと。そしていろんな奉仕もやり始めます。それらが順調な時は自賛です。自画自賛です。自分がそういうことを出来ていることに嬉しくなって、そしてルンルンになるわけです。ところが出来なくなった時にそういう人は急に落ち込みます。「私はダメなクリスチャン。」妥協してしまったり、怠けてしまうこともあるわけですから、そういう時に責めてしまうわけです。そのようなパン種はあなたの心にも、この教会にも見受けられるものであります。注意したいと思います。一見してはなかなか分からないものです。でも、そのわずかなものが粉全体を膨らませてしまう。非常に恐ろしいものだ、影響力の強いものだ、大きいものだということを知って頂きたいと思いません。

そして 10 節に『私は主にあつて、あなたがたが少しも違った考えを持っていないと確信しています。しかし、あなたがたをかき乱す者は、だれであろうと、さばきを受けるのです。』「あなたがたをかき乱す者」それは、先にも見たように、よく走っていたガラテヤ人を妨げる、割り込むような人たち。わずかなパン種を持ち込むような偽教師たち、偽クリスチャンたち、律法主義者、ユダヤ主義者。彼らが“**かき乱す者**”と呼ばれています。そのような聖書に書かれていない異端的な教えを持ち込む者、説く者は皆さばきを受けるとあります。ヤコブ 3 章 1 節にこう書いてあります。『私の兄弟たち。多くの者が教師になってはいけません。ご承知のように、私たち教師は、格別きびしいさばきを受けるのです。』教師は、格別厳しいさばきを受けます。この教師というのは勿論第一義的には、ヤコブが私たちと言っていますから、聖書を教える教師たち、牧師たちのことを言っています。やたらめったら聖書教師、牧師になってはいけません。なぜならば彼らは格別厳しいさばきを受けるからと。そのことを覚悟した上で、承知した上で、神の召しに従って教師になるべきであります。勿論これは牧師や所謂神学校の先生とか、そういう人たちだけを指すのでは

なくて、聖書の御言葉を分かち合うすべてのクリスチャンたちにこのことは問われております。親が子どもに御言葉を教える。若しくは教会で小さな子供たちに、キッズチャペルとかでもこれから教える人たちも出てくるでしょうし、また自分よりも若い信仰的にまだ未熟なそういうクリスチャンに御言葉を教える、分かち合う。これからバイブルスタディーグループもいくつも家庭の中からも生まれるかもしれません。そういうバイブルスタディーをリードする人たち、彼らにもこの言葉は適用されます。あなたがたは格別厳しいさばきを受けますよと。もしあなたが間違ったことを教えるならば、聖書に書かれていないような律法主義の教えを子供たちに教えるならば、若い者たちに教えるならば、その影響力は絶大です。ですから格別厳しいさばきを受けることになります。場合によっては、小さな子どもたちにつまづきを与えるならば、あなたは首に石臼の石を巻き付けられて、そして湖の深みに。溺れて死んだ方がマシだとすら言われてしまいます。死んだ方がマシなぐらい大変な罪を犯してしまうわけです。

だからこそ**第二テモテ 2 章 15 節**が大切な聖句となります。『あなたは熟練した者、すなわち、真理のみことばをまっすぐに説き明かす、恥じることのない働き人として、自分を神にささげるよう、努め励みなさい。』御言葉を学ぶことに心を砕きなさい。このことに一生懸命になりなさい。このためにあなたは献身しなさい。それは勿論バイブルカレッジとか、神学校に行きなさいという意味ではありません。そうではなくて、日々聖書を読み、学ぶことをあなたのライフワークとしなさい。一生涯あなたは聖書を学ぶことに徹しなさいと。それが、すべてのクリスチャンの働き人のなすべきことである。そうでなければあなたは恥じることになる。恥じ入ることになる。そうでなければあなたは首に石臼の石を巻き付けられて、湖の深みに落とされてしまうかもしれない。そういうことも 1 人 1 人は是非自分自身に適用して、今はまだあなたは聖書の教えを説かれる側、学ぶ側、教わる側、聞く側にあると思っっているかもしれません。でも、**ヘブル書**に書かれている通り「年数からすればあなたがたは教師になっていなければならない。」と。「その年数とは、いったいどれぐらいですか。」と、年数が何年かは、書いてありませんが、ただイエスの弟子たちは 3 年半イエスと共にいて、既に彼らは教師でありました。ですから 3 年半もう既にこの教会に来てバイブルスタディーをすべて聞いているならば、もうあなたは充分資格があると思っ頂きたいと思います。イエス・キリストと共に 3 年半もう歩んでいるならば、あなたは教師なっていなければならないのです。そしてあなたは格別厳しいさばきを受けることになります。それを避けたければ**第二テモテ 2 章 15 節**、これを常に実践して頂きたいと思います。「私はまだ若い。」だからといって他人事と思わないで下さい。「私はまだ信仰歴が浅い。」だからといってまた他人事と思わないで頂いて、是非自分の中にパン種がないかどうか、また自分がパン種を他の人に撒き散らしていないかどうか。重々御言葉と向き合っ頂きながら、注意して頂きながら、慎重に神の言葉を正確にまっすぐに解き明かして頂きたいと思います。

次に 11 節。『兄弟たち。もし私が今でも割礼を宣べ伝えているなら、どうして今なお迫害を受けることがありましよう。それなら、十字架のつまづきは取り除かれているはずです。』もしパウロが、割礼を受けなければ救われないという律法主義の教えを説いているならば、パウロはこの割礼派の人たちからは迫害されなかつたでしょうと。当然です。でも、迫害されているということは、パウロの説いているメッセージは、これは律法主義の教えではない。まるで正反対の恵みによってのみ救われる、信仰義認の教えであるということが明らかなかわけです。クリスチャンは世にあっては患難があります。キリスト・イエスにあって敬虔に生きようと願う者には、迫害が待ち受けています。これは避けられないことです。でも、もし私たちがこの世と調子を合わせて、この世に妥協して、この世の教えに合わせるならば、私たちは迫害を免れることができます。この世も律法主義であります。「努力は決してあなたを裏切らない。すべては努力の賜物。自分を信じるんだ。自分のセルフイメージを向上させること、それが 1 番健全である。」と。精神的に病んでいる人たちも「自分を受け入れ自分を愛し、そして自分を高めるならば、もっと可能性を広げることも出来る。」自己啓発。そういうことで自己実現につながると。そういうことをこの世は説きます。そして、それと同じようなことをあなたも考え、あなたも説いているならば、この世からは迫害されないでしょう。ところが、あなたがパウロと同じ十字架のメッセージを語るようになると、人はあなたのことを煙たがります。十字架のつまづきというものがそこに生じるわけです。ただ私たちはこの十字架こそが、ただ 1 つの救いの手立てであることを知っております。これ以外のことを説いても、そこには救いがないことを知っているのです。ただの気休めでしかないことを知っています。パウロはこのこ

とを**第一コリント 1 章**で詳しく述べています。十字架の言葉、それが私たちが救うんだと。だからパウロは**第一コリント 2 章**のところでもそうですけれども「私は十字架につけられたお方、キリスト・イエス以外宣べ伝えることはすまいと心に決めたと、決心したと言っているわけです。説教のプリンスとして名高いチャールズ・ハットン・スポルジョンも「十字架は神の最高の考えであり、神のすべての計画の中心である。神の愛の最高峰が十字架である。」と述べています。私もそれに賛同します。十字架は神の最高の考え・アイデアであって、神のすべての計画の中心である。だからイエス・キリストの十字架を宣べ伝えるわけです。神の愛の最高峰が十字架である。だから十字架を宣べ伝えるのです。でも私たちは人の顔色を見てしまいます。人を恐れてしまいます。イエス・キリストの十字架なんていうことを口にした途端、気を悪くされてしまう。その途端、距離を置かれてしまう。その途端、弾圧が始まる、迫害が始まる。十字架という言葉を出しただけで、もう嫌われてしまって相手にもされない。その結果不利益を被るかもしれません。友だちを失うだけではなくて、職場も失ってしまうかもしれません。この十字架というのは、律法主義者にとってつまずきとなります。「行いによらなければ救われぬ。」と言う人たちには、この十字架は到底受け入れ難いものであるということです。でもこの十字架こそがスポルジョン曰く「**神の最高の考えであり、神のご計画の中心である。そして神の愛の最高峰である。**」と。それを律法主義者たちは拒むのです。なぜ拒むのでしょうか。なぜつまずくのでしょうか。なぜそれを嫌うのでしょうか。なぜそれに対して腹を立てるのでしょうか。それはイエス・キリストの十字架を信じるといことは、こういうことだからです。つまり、自分を救う手立てが自分には無いことを認めなければならないからです。自分が惨めな救い難いどうしようもない罪人であるということを受け入れなければならないからです。だから彼らは嫌うのです。「十字架なんて嫌だ。聞きたくない。」それで彼らはつまずくわけです。むしろ律法主義者たちは「自分には出来る。自分にはもっと価値があるんだ。」と。自分が自分の救いにおいて何一つ貢献しない。自分の行ないが何一つそこには含まれないとなると、彼らは自分を認められないようで、自分を失うようで、自分には全く価値が無いようで、それがどうしようもなく、たまらなく嫌なんです。だから彼らにとって十字架はつまずきとなってしまいます。「十字架以外には救いはない。」なんてことを言うと怒り出すわけです。「イエス・キリストを信じなければ救われぬ。そんな偏狭な、そんな排他的な。イエス・キリストを信じない者は全員地獄に行く。ふざけるな。私のお父さん、お母さん、おじいちゃん、おばあちゃんも、先祖もイエス・キリストを信じなかった。じゃあ彼らも皆地獄に行ったのか。お前はそう言うのか。」と、食って掛かってきます。十字架は神の最高の考えであり、神のすべての計画の中心であります。そして神の愛の最高峰が十字架であります。私はそれ以外には知りません。知らないことについては、私は何もコメントすることは致しません。でもハッキリ分かっていることは、神は、イエス・キリストはすべての人のために十字架に掛かって死んで下さったこと。すべての人の罪をあの手で十字架の上で負って下さったこと。それは私の罪だけではなくて、私のお父さん、お母さん、おじいちゃん、おばあちゃん、ご先祖様たちのすべての罪です。日本がかつて占領国に対して行ったすべての罪もそうです。全世界のすべての人の罪、それをイエス・キリストが負われた。これが聖書の説いているところでもあります。それを私は信じていますので、私は神の愛を頂いて、神の恵みを頂いて救われているのであります。それ以上のことは知りません。私は自分で自分を救うことが出来ないことも知っています。自分がどうしようもない罪汚れた者であることを知っています。でも、そういう者でもイエス・キリストは救って下さる、愛して下さる、赦して下さる、受け入れて下さるということを知っています。そして、こういう私が救われたのであれば、世界中の大半の人が救われるということも私は信じています。キリスト教を毛嫌いしている人であろうと、イエス・キリストの十字架を踏みつけるような人であろうと、どんな罪人でも救われると私は信じております。ただ、それを神は無理やり押し付けることは致しません。強要致しません。ですから、その人が自らの意志で、自由意志を行使して、この神の最高の救いのご計画に与るといことをしなければいけないわけです。この十字架という神のアイデアを受け入れるということ。神の愛を信じて受け入れるということ。自らしなければいけない。それだけです。死んでしまった人はどうなのか。私には分かりませんが、でも神は公平な方ですから、必ず私が聞いたことと全く同じことを彼らにも聞かせて下さるでしょう。そして彼らにもチャンスを与えて下さるでしょう。「イエス・キリストの福音が 1 度も語られていない未開の地の人たち。どこかのジャングルの未開の文明が全く届いていない、文字もないようなそんなところの人た

ちは、一体どうなんですか。」イエス・キリストの名前を聞いたこともないような、そんな人たちはどうなるのでしょうか。そんなことは私のビジネスではありません。もしそんなに気になるなら、あなたがそこへ行ってイエス・キリストを宣べ伝えなさいと言います。神はすべてをご存知ですから、私は神様が愛の方であり、公平な方であり、そして神の恵みは最もふさわしくない者に与えられることを知っていますから、それを信じてただ宣べ伝えるだけであります。それ以上のこと、それ以外のことを知ろうとも思いませんし、伝えようとも思いません。

12 節。『あなたがたをかき乱す者どもは、いっそのこと切り取ってしまうほうがよいのです。』かき乱す者は既に見たように、律法主義を説く人たち、行いによらなければ救われないという行為義認の教理を説く者たち、割礼派、ユダヤ主義者の人たちです。彼らは、いっそのこと切り取ってしまう方が良いと。新改訳聖書(第二版)の方では『いっそのこと不具になってしまったほうがよい』と訳しています。そして、そちらの方が実は原文に近いのです。不具になるということは、どういうことか。新共同訳聖書ではもっとリアルに訳しています。『去勢してしまえ』それが本文の意味です。かき乱す者たちは、不具になってしまえ、去勢してしまえ。去勢とは一体何ですか、と分からない人もいるかもしれません。去勢について説明しますと、割礼というのは男性のおちんちんの皮の先を切り取ることです。これを割礼と言います。去勢というのは、男性のおちんちんを根本から切り落とすことです。分かりやすいと思います。そんなこと、教会で牧師が言っているんですか、とあなたは思うかもしれませんが、それは聖書に書かれていることです。私が言っている言葉ではなくて、聖書に書かれている言葉であります。ここで『いっそのこと切り取ってしまうほうがよい』というのは、「おちんちんを切り落としたほうがよい」と。それが逐語訳、直訳です。そこまで激しい露骨な言葉を使う理由があるわけです。それは、割礼派の教えというのは(かき乱す者です。)、彼らは「イエス・キリストのあの十字架の死が全く無意味だった、無益だった、ただの犬死だった。」ということを説いているわけです。それはパウロにとっては到底我慢ならないことです。「イエス・キリストの十字架の行ない、それは不完了である、未完了である、不完全である。割礼を受けなければ救われない。」そんなことを言うならお前たちはもう根本から切ってしまうと。パウロの感情も込められています。

そして **13 節。**『兄弟たち。あなたがたは、自由を与えられるために召されたのです。ただ、その自由を肉の働く機会としないで、愛をもって互いに仕えなさい。』パウロは所謂律法主義を否定しておりますけれども、律法主義を否定するということは、何をしても良いという無律法主義を説いているのではないということです。その無律法主義、放縦主義とも言います。何でもあり、やりたい放題、好き放題。そのような自由と履き違えてはならない、とパウロは言っています。

ここで有名なマルティン・ルターの『キリスト者の自由』という本の冒頭の言葉を皆さんに御紹介したいと思います。『キリスト者はすべてのものの上に立つ自由な君主であって何人にも従属しない。キリスト者はすべてのものに奉仕するしもべであって何人にも従属する。』ちょっと分かりにくい言葉かもしれませんが、クリスチャンはすべての人の上に立つ自由な主人であって誰にも従属しない。クリスチャンはすべての人に奉仕するしもべであって誰にも従属すると。それがルターの言葉であります。私たちはイエス・キリストの恵みによって奴隷のくびきから解放されたのです。奴隷のくびきは、つまり罪の奴隷ということです。律法主義では必ず罪しか生まないからです。でも、ここでパウロはむしろ私たちは罪の奴隷から解放されたのだから、私たちは自由となった身であるから、その自由むしろ愛において生かすように。罪の奴隷から愛の奴隷へと。そこには確かに束縛があります。人が愛し合えば、そこには当然束縛が生じます。夫婦関係に束縛がないと言ったらどうでしょうか。やりたい放題、好きな男と、好きな女性と性的関係を結んでやりたい放題。そうしたらもう夫婦関係は破綻ということです。健全な愛の中には必ず縛りがあるのです。自由が健全に機能しているそのところには必ず縛りがあります。だから法律があるわけです。法律がなければ、無法地帯ということです。やりたい放題です。でも法律があるということは、縛りがあるということです。でも縛りがあるからこそ、自由が保障されているんです。自由が侵害されないわけです。自由が保たれるわけです。矛盾するようなんですけれども、それが事実であります。ですから私たちは確かに奴隷から解放されました。自由になったんですけれども、でもある一定の縛り・束縛というものが実際に存在するということです。自由になったからといって肉の欲望

のおもむくまま、やりたい放題、何でもしてよい、というわけではないです。愛をもって人に仕える。煙草を吸う自由もあります。お酒も飲む自由もあります。別に法律に反しません。でも、もし私が煙草を吸ったり、お酒を飲むならば、ニコチン中毒の人はどのように思うでしょうか。アルコール中毒の人はどのように思うでしょうか。つまづかないでしょうか。折角この惨めな依存症から解放されたいと願っているのに、牧師がプカプカ煙草を吸ったり、酒を浴びるように飲んでいたらどうでしょうか。もう教会には来れなくなります。私には何をやる自由もありますけれども、でもそれを肉の働く機会としないで、それをむしろ人に仕える愛の機会とします。

ローマ 6章 12節以降も後で読んでみてください。そこでは、罪の奴隷から従順の奴隷へと私たちは変えられたんだということをパウロは述べています。ですから自分の手足を肉の欲求のため、むなしい罪のライフスタイルのために用いるのではなくて、むしろその手足を神の義のために従順の奴隷として使うようにと、パウロは勧めているわけです。その煙草を買うお金があるならば、そのお酒を買うお金があるならば、そのお金を何に使えるでしょうか。その煙草を吸う時間、そのお酒を飲む時間、それがあれば、それを何に使えるでしょうか。私たちは自由を肉の働く機会としないで愛をもって互いに仕えるという、愛の奴隷となることを選ぶものであります。なぜならば私たちの主イエス・キリストが、私たちのためにこの愛の奴隷となって下さったからです。自らの権利を主張せず、自らの特権を行使することをせず、私たちを救うために、私たちをまさに罪から解放するために、罪の中毒症から解放するために、私たちの最善のために、すべてを犠牲にして、すべてを捨てて、そしてイエスは仕えるものとなって下さったわけです。

“ちいろば先生”として有名な榎本保郎という人が、この箇所ですらこのようにコメントしています。「ある人が自由には、〇〇からの自由と××への自由とがあり、本当の自由は〇〇からの自由だけではなく、××への自由、人を愛する自由だと書いていた。私たちは人を愛するというに対して随分不自由である。そこではいつも愛していこうと思っても、自分が邪魔になったり、この世の生活がブレーキになってきたりする。そういう中で人を愛していくという自由、そういう目的への自由をパウロは言っているのである。」と。やりたい放題、何でもできる自由ではなくて、人を愛する自由です。キリストを知る前には、私たちは出来ないことがいっぱいあったわけです。例えばキリストを知る前は、私たちは正しいことが出来なかったのです。良いと私たちは勝手に思って、それが正しいと思って勝手にやっていたかもしれませんが、それは必ずしも神の目に良いものではなかったはずであります。自分の栄光を求める、そういう動機ですらならば全てそれは的外れです。人はそれを認めてくれても、良いというものであります。パウロは、だからそれらはちり・あくただと言っているわけです。キリストを知る前、私たちは的外れなことしか出来なかったのです。要するに罪を犯す以外には何も出来なかった不自由な者だったのです。ところが、キリストを知ってからは私たちは罪も犯さないのですけれども、でも罪を犯さない自由が与えられたわけです。神の御心を知って、神の御心を行うことのできる選択が今与えられているということです。だから私たちはこの与えられた自由を無駄にしないで、折角罪を犯すことも、罪を犯さないことも選べるのだから、むしろ私たちは罪を犯さないことを選ぼうではないか。今まで出来なかったことが出来るようになったのだから、だから私たちは今まで出来なかったことを積極的にこの自由を活かして行おうではないか。例えば今までは人を赦さなかった。今はどうでしょうか。キリストがあなたのような赦し難い人を赦して下さったのです。そうであれば私たちは誰でも赦せるはずであります。キリストを知る前には絶対に思いもつかなかったことです。「絶対にあいっだけは許さない。一生恨んでやる。墓場まで持っていくんだ。」とそう思っているけれども、キリストを知ってからは不思議と赦せるようになってしまうのです。赦したくなるのです。出来なかったことが出来るようになるわけです。憎らしい人も愛らしくなるわけです。敵を愛し、迫害する者のために祈り始めると、いつの間にかその祈りの対象となっている人が敵から隣人になってしまうわけです。ですから私たちはその自由を行使すべきです。人を愛せなかった不自由、神を愛せなかった不自由から、私たちは人を愛することの出来る、神を愛することの出来る自由へと招き入れられたわけです。ノンクリスチャンは神を愛することが出来ないのです。ノンクリスチャンは本当の意味で人を愛し、赦すことは出来ないのです。これが出来るのは、クリスチャンだけなんです。これは自由な特権です。それなのにあなたはこの特権を活かさないでいる。折角与えられている自由なのに、むしろくだらない

ことにその自由を使ってしまっている。もったいない話であります。そんな時間があるならば、そんなお金があるならば、そんな自由があるならば、パウロの勧める通り愛をもって互いに仕え合いなさい。これが私たちのなすべきことでもあります。

14 節のところにも『律法の全体は、「あなたの隣人をあなた自身のように愛せよ」という一語をもって全うされるのです。』とあります。律法の全体というのは、勿論旧約聖書全体ということです。それは「あなたの隣人をあなた自身のように愛せよ」という一語、これはレビ記 19 章 18 節の聖句。これで要約されると言っています。実際に律法と愛というのは相反するように見えるかもしれませんが、聞こえるかもしれませんが、ただ法律というものは基本的には愛によって定められています。例えば、制限速度 40 キロというところがあるとしたら。これは運転者がスピードを出し過ぎて事故を起こさないため。言うなれば愛の配慮ということ。そして駐車違反も、そこに住んでいる人に迷惑がかからないため。これも愛です。全てが愛とは言いませんけれども、ただ基本的にはそれがまともな法律であるならば、それは愛に基づくものです。ところが私たちは制限速度 40 キロのところを 80 キロで走って、スピード違反で捕まってしまうとすると、取り締まりをする人には全く愛を感じません。「なぜ私なんですか。あの車だって。知らなかった。」と、いろいろなことを言うわけですが。しかし、基本的には法律も神の律法も同じで、それは愛に基づくものです。私たちにおいて益となるもの、または私たちの周りの人たちにも益となるもの。律法の中心もやはり愛であります。10 の言葉『十戒』が、モーセの十戒が律法の基盤となっておりますけれども、そこには沢山の禁止事項があっても愛を感じないと思うかもしれません。でも実際にはそこは命令形ですが禁止を強調しているのではなくて、むしろ未完了形となっていて、例えば『殺してはならない』というところは『あなたは殺さないでしよう。殺すはずがないでしよう。』なぜならば十戒の基盤というのは、神がイスラエルをあの奴隷の家から、エジプトから連れ上って下さったから、あそこから救い出し下さったから。だからあなたはもう人を殺さないでしよう。本当は『殺してはならない』ではないのです。『殺すはずがないでしよう。』本当は『盗んではならない』ではないのです。本当は『あなたはもはや盗むことはなくなるでしよう』全部本当は愛がベースなのです。「これだけの愛を受けているのだからあなたは隣人にそんな害を与えることは決してしないでしよう。」「これだけあなたは愛されているのだから、あなたは両親を敬うに違ひありません。」ということです。そのようにして、「〇〇しないはずだ」というのが、本来の十戒の意味するところであり。ただ頭ごなしに「ダメだ。いけない。禁止だ。」と言っているのではないです。愛がベースなんです。愛に基づいてこの 10 の言葉が与えられているということです。ですからこれはむしろ戒めというよりも愛の言葉であります。

そしてローマ 13 章 8 節。これもパウロの言葉です。『だれに対しても、何の借りもあってはいけません。ただし、互いに愛し合うことについては別です。他の人を愛する者は、律法を完全に守っているのです。』『他の人を愛する者は、律法を完全に守っているのです。』と。その後には『「姦淫するな、殺すな、盗むな、むさぼるな」という戒め、またほかにもどんな戒めがあっても、それらは、「あなたの隣人をあなた自身のように愛せよ」ということばの中に要約されているからです。10 愛は隣人に対して害を与えません。それゆえ、愛は律法を全うします。』と書いてあります。ですから「姦淫するな、殺すな、盗むな、むさぼるな」というのは、これはすべて相手を愛しているならば当然のことであって、言われるまでもないことであって、愛しているならば当然不倫なんかしません。愛しているならば当然人を殺しません。愛しているならば当然その人から盗みません。そういうことです。

またマルコの福音書 12 章 28～31 節のところ、ひとりの律法学者がイエスに対してすべての命令の中でどれが一番大切ですかと尋ねる場面があります。イエスは 1 番大切なのは『心を尽くし、思いを尽くし、知性を尽くして、力を尽くして、あなたの神である主を愛せよ。』という戒めと、そしてもう一つ『あなたの隣人をあなた自身のように愛せよ。』この 2 つの大事な命令は他にはない、とおっしゃいました。このガラテヤ 6 章 14 節のところではレビ記 19 章 18 節の御言葉だけを取り上げています。イエスはその前に申命記 6 章 5 節『心を尽くし、精神を尽くし、力を尽くして、あなたの神、主を愛しなさい。』という言葉は述べていますが、2 番目のレビ記 19 章 18 節、この後者の 2 番目の方だけをパウロは取り上げて『律法の全体は、「あなたの隣人をあなた自身のように愛せよ」という一語をもって全うされるのです。』と述べています。どうして「隣人をあなた自身のように愛せよ」だけをパウロは取り上げたのでしょうか

か。それは**第一ヨハネ 4 章**のところに『目に見える兄弟を愛していない者に、目に見えない神を愛することはできません。』と。ですから、神を愛しているということは隣人を愛しているということになります。隣人を愛していないという人は、当然神を愛していないということですから、実際にそれは一語で要約されるわけであります。人を愛しているなら、その人は神を愛しているわけです。神を愛しているなら、その人は人を愛するようになります。人を愛していないならば、憎んでいるならば、赦していないならば、あなたは神を愛していないということです。シンプルです。単純なことです。『**7 愛する者たち。私たちは、互いに愛し合ひましょう。愛は神から出ているのです。愛のある者はみな神から生まれ、神を知っています。8 愛のない者に、神はわかりません。なぜなら神は愛だからです。」「私は神様のことが分からないんです。」**という人に限って、愛がない人です。あなたが愛するようになれば自然に神のことが分かるようになります。なぜならば、神は愛だからです。神は、**実に、そのひとり子をお与えになったほどに、世を愛されたわけ**です。ですから、その神が私たちに愛を注がれているわけです。私たちはその愛の中に今は生かされているわけです。この愛に私たちが気付くならば、もう既に愛されているという事実気付くならば、私たちは自分のうちにある神の愛をもって愛しにくい人、愛しづらい人、そういう人たちにも無条件で与えられる神の愛をもって愛することが出来るようになります。**第一ヨハネ 4 章 11 節**のところに『**愛する者たち。神がこれほどまでに私たちに愛してくださいましたのなら、私たちもまた互いに愛し合うべきです。**』なぜ愛せないのでしょうか。それはあなたが神の愛を受け取ろうとしないからです。これほどまでにあなたを愛しておられ。その“これほどまでに”が分からないのです。というよりも、分かりたくないのです。なぜならばあなたはその人を愛したくないからです。自ら分からなくしているんです。「分からない。分からない。」ではなくて、あなたが自ら選択しているのです。分かろうとしない。なぜならば、あなたはその人を愛したくないからです。でも、その人を愛そうとしないならば、赦そうとしないならば、あなたはいつまでも神が分かりません。そしてあなたは生涯ずっと惨めな牢獄で暮らすことになります。

そして、**ガラテヤ 5 章 14 節**のところに目を戻して頂きたいと思いますが、“**全うされる**”という言葉があります。『**律法の全体は、一語をもって全うされる。**』この一句に尽きる、という表現です。この一句を守ることによって果される、要約されているだけではなくて、全うされているということです。「成就されてしまっている。満たされてしまっている。」と訳される言葉です。「容器を満たす」というニュアンスをこの原語に見ることが出来ます。『**隣人をあなた自身のように愛せよ**』という一語をもって全うされるというのは、成就されている、満たされている。容器がいっぱいになっているというそういうイメージです。普通は律法の言葉の後には、“行う”とか、“守る”とか、“実践する”とか、“遵守する”なんていう言葉が続くように私たちは連想しますけれども、でもイエス・キリストは**マタイ 5 章 17 節**のところで『**わたしが来たのは律法や預言者を廃棄するためだと思っ**てはなりません。廃棄するためではなく、成就するために来たのです。』と。全うするため、満たすために来た。実際にイエス・キリストはその生涯において完全に律法の全てを守り行い、律法の要求のすべてに答えて、そして神を満足させたわけであります。勿論メシア預言といったものも文字通り預言を成就したということもされたわけ。隣人を愛することによって、私たちは自分に出来なかった、とても従いきれなかった、守り行いきれなかった律法を全うすることが出来るのです。これは素晴らしいことです。隣人をあなた自身のように愛する、それだけでいいんです。

宗教改革者のジャン・カルバンは、ジュネーブ教会教理問答の中において(いろいろ教理の問答をするそういう入門書というのがあるわけです。)、次のように論じています。「**私たちは生まれつき自分自身を愛する傾向が強く、この感情が他のすべての感情に優先しているように隣人への愛が私たちを連れ出し、導き、私たちの思いと行動全ての規則となるようにという意味だ。**」と。隣人をあなた自身のように愛せよというのは、そういう意味だというふうに説明しています。私たちはもう生まれつき自分を愛する傾向が強いと。これは前にも皆さんにお話ししたと思います。集合写真の中で真っ先にあなたは自分の姿を探すわけ。自分に1番関心があるのです。「でも私は自分のことが嫌いなんです。」そういうあなたは自分のことしか考えていないです。自己嫌悪している。「自分が嫌いで嫌いで仕方がないのです。」と言う人ほど、自分が大好きなんです。自分のことしか考えられない人たちです。リストカットをします。それは自分を見てもらいたいからです。アピールしているわけです。自殺をします。それも自分を知らしめた

いからです。自分の存在を世間にもアピールしたいわけです。ですからいずれにしても私たちは自分というものに囚われてしまっているわけです。そして、自分に囚われている限りは、自己愛という歪んだ愛の中に幽閉されている限りは、当然のことながら神を愛するとか人を愛するということは出来ません。でも、その自分に向けられている最大の関心というものを、四六時中自分のことしか考えられないそういう思いを他人に向けることが出来る。それがキリストによって実現されます。隣人というのは勿論私たちが選べる人ではないということも知って頂きたいと思います。愛しやすい人、そういう人が隣人だったらなあと思うかもしれません。尊敬できる人、キックバックがありそうな人、愛したらそれなりのメリットがありそうな人とか、ギブ&テイクでいろいろメリットがありそうだという人を私たちは隣人として思うわけですが、でも聖書的には隣人というのは、勿論単に隣にいる人というふうにも言えるでしょうけれども、イエスが「敵を愛し、迫害する者のため祈いなさい。」とされています。そして、自分を愛してくれる人を愛したところであなたがたにどんな報いがあるのか。自分の兄弟だけに挨拶をしたところでどんなに優れたことをしたのだらうかというふうに**マタイ 5 章**のところで述べております。ですから、むしろあなたが気に食わない、あなたをむしろ嫌って憎んで敵対する。」そういう人たちですら、あなたの隣人であるとイエスは言っているわけです。あなたにとって価値がない、意味がない、と思われる人ですらあなたの隣人であるということです。またカルバンはジュネーブ教会教理問答で「隣人とは私たちの両親や友人、或いは私たちとしばしば交際する人だけではなく、私たちの知らない人や敵さえも含んでいます。」と答えた後で「ですから、もし誰かが私たちが憎むとしても、それはその人だけの問題であって、神の秩序によれば彼が私たちの隣人であることは変わりなく、私たちがそのように見なければならぬ。」と続いて書いてあります。「**神の秩序**」とカルバンが言っているのは、神が地上のすべての人々の間に置いた絆のことであると。いかなる人の悪意によってもこれが廃棄されることはありません、と語っています。神様があなたに出会わせてしまったのです。関わってしまった人、それはすべて神の摂理において神が許されたことです。「こんな人と出会わなければ良かった。こんな人と結婚しなければ良かった。」そういう人も全部神が許されたわけですから、それは神の秩序ということです。親もあなたは選べません。選べない。そこには神の秩序、神の摂理があるわけです。たまたま出会ってしまった。そこにも神の摂理があるわけです。そこで関わった人は皆隣人であるということです。

また、良いサマリヤ人の物語を皆さんはよく知っていると思います。そこでユダヤ人とサマリヤ人の犬猿の仲においても、サマリヤ人が強盗にあつて瀕死の状態であったユダヤ人の人を救出して、そして手厚く看病をして、完全に回復するまで宿屋で宿賃まで払って、よくしてくれるという、そういうおそらくこれは実話だと思われま。たとえ話というよりも実際にあったことをイエスが取り上げているんだと思いますけれども、その中で誰が隣人になったのかということイエスは言わんとし、その結論部分を明らかにするために敢えてこの物語を使ったわけです。全くの赤の他人です。通りがかり、通りすがりの人です。一面識もない、親切にする義理もないそういう相手です。そして、相手から勿論見返りも求められそうにないわけです。身ぐるみ剥がされて、強盗に遭っているわけですから、瀕死の状態ですから、別に何も得るものがないかもしれません。でもそういう人たちに対してどうすべきか。無視して通り過ぎることも出来ます。祭司やレビ人たちは、見て見ぬ振りをして通り過ぎて行ったわけです。自分の都合がある。今から教会の集会があるから、会合があるから、ビジネスの約束があるからと言って通り過ぎることも出来たわけです。それでもなお愛を向けることが出来るかどうか。私たちは勿論それは簡単でないことを知っています。どの人にも親切なんか出来ないと私たちは思います。自分の生活に支障が出てしまうかもしれない。いろいろな理由付け、理屈を探し求めようとします。知り合いならともかく赤の他人に対してまで、とってしまいます。そのようにして私たちは勝手に自分の愛の範疇というものを決めてしまうのです。狭めてしまう。愛の制限を、リミットを付けてしまうということです。限定してしまう、枠を決めてしまう。そして、自分の枠の中だけで隣人を見出して愛そうとするわけです。それは不自由な愛ということです。それはイエス・キリストを知らなかった時の姿であります。でもイエスを知って私たちはそのような枠が完全に取られたことを経験します。自分のメリットとか、報いだとか、自分の生活だとか、都合だとか。自分の枠、自分の範囲、自分の生活、自分、自分、自分というのはもうなくなってしまうわけです。むしろこのサマリヤ人のように、全く一面識もない、全く見返りを求められそうにない、しかもユダヤ人とサマリヤ人は付き合いをしない、

犬猿の仲だったとあります。サマリア人はユダヤ人から見下されていたのです。お前たちは合いの子だと、差別用語が使われていたわけです。お前たちは半分ユダヤ人の血が入っているけれど、半分は異教徒の血が入っている。お前たちは偶像礼拝者たちだ。お前たちは決して救われない。アブラハムの子どもにはなれないと、そのようにして見下されていたわけです。にもかかわらず、サマリア人はこの半死のユダヤ人を無条件で受け入れて、そして彼に本当に親切にしてあげたわけです。通り過ぎることも出来たのに、無視することも出来たのに、「ざまー見ろ、ユダヤ人め。」と日頃の恨みを鬱憤を晴らすことも出来たのに、敢えてそれをしないでただ隣人を愛したわけです。自分を愛するように隣人を愛したわけです。自分もそうしてもらいたい、そう思えばこそであります。そのことをイエスは律法学者たち、所謂律法主義者たちに対してチャレンジしたわけです。まあ彼らはその物語を通して模範解答をしたのです。隣人は誰かという設問に対して、彼らは「サマリア人こそ、あのユダヤ人を助けた人物こそ模範であって、そしてそれが隣人である。」と。誰が隣人かということは正しく答えられたんですが、でもその上で主は答えられます。「それは模範解答である。それは正しい答えである。ならばあなたはそれを実行しなさい。」とイエスは言われたわけです。「誰がその人の隣人になったのですか。その人を助けてくれた人です。素晴らしい模範解答だ。」で、イエスは終わらなかったということです。私たちも模範解答はします。私たちも模範的な信仰は持ちます。でもそこには行いが伴っているでしょうか。愛によって働く信仰がそこにはあるでしょうか。「行ってあなたも同じようにしなさい。」とイエスは言われました。私たちはどうでしょうか。模範解答止まりで終わっていないでしょうか。「答えが分かったならば、あなたも行って同じようにしなさい。愛によって働く信仰だけが大事なのです。」とパウロは言いました。愛することです。それはただの概念ではありません。ただの感情ではありません。それはまさに行い、アクション・ワークです。それは働くということです。

テキストに戻って頂きたいと思います。イエス・キリストはそのようにして隣人が誰であるのかを明らかにした上で、その隣人を愛しなさいと、実行しなさいと。まずは隣人というその範疇です。私たちはそれを勝手に狭めて、限定して、自分の範疇で自分の愛をもって自分の都合で自分の動機で私たちは不自由な愛を持っていたわけですがけれども、でもイエス・キリストを知ってからは、その神の愛を受けてからは私たちはそのような不自由な状態から完全に脱して解放されて、人を愛する自由を与えられたわけです。イエスがおっしゃられているように「行ってあなたも同じようにしなさい。」と言われて、私たちは同じことが出来る者になったのです。今までは出来なかったのです。頭で分かっていても出来なかったのです。赦さなければいけないことが分かっていても赦せなかったのです。愛さなければいけないことが分かっていても愛せなかったのです。「だってあの人は私を傷つけたし。だってあの人はまた裏切るし。だってあの人はまた同じことを繰り返すし、私には何のメリットもない。」それがイエス・キリストを知る前の私たち、不自由であったわけです。このお互いに愛し合うということは、イエス・キリストがヨハネの福音書13章34~35節でも新しい戒めとしてご自身の弟子に直接与えられているものであります。『**34 あなたがたに新しい戒めを与えましょう。互いに愛し合いなさい。わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合いなさい。** **35 もし互いの間に愛があるなら、それによってあなたがたがわたしの弟子であることを、すべての人が認めるのです。**』私たちが互いに愛し合っているならば、私たちの周りにいるノンクリスチャンの人たちも私たちがキリストの弟子であるということを認めてくれると言っているわけです。逆にもし兄弟姉妹が憎み合っているならば、愛し合っていないならば、誰も周囲のノンクリスチャンの人たちは私たちがキリストの弟子であるということは認めてくれません。「それでもクリスチャンか。」と言います。クリスチャンの夫婦が愛し合っていないならば、その子どもその孫はあなたのことをクリスチャンとは認めません。あなたのお父さんお母さんもあなたのことをクリスチャンと認めません。兄弟姉妹、クリスチャンを愛さないでいるならば、むしろノンクリスチャンにとってはつまずきとなってしまいます。折角彼らがイエス・キリストを知る機会が与えられているのに、あなたが兄弟姉妹を愛せないがゆえに彼らが救われる機会をあなたが奪ってしまっている。これは大変なつまずきであります。「福音を宣べ伝えています。福音を説明した分かりやすい小冊子をプレゼントしました。聖書すらプレゼントしました。」とあなたは言うかもしれませんが。「伝道の妨げなんてとんでもありません。私は積極的に伝道しています。」と。ところがそのあなたが兄弟姉妹を愛していないならば、あなたは自分の行ったすべての良い

行いをすべて無駄にしたということになります。無意味なこととした。却ってつまずきとしてしまったということです。愛すること、それがクリスチャンのしるしであります。それが最大の証しであります。それは自分を愛する愛ではありません。そうではなくて、神と隣人を愛する愛であります。私たちは自分を愛する醜い歪んだ自己愛から解放された者であります。そしてもっと大きな、広い、深い、全く次元の異なる言わば異次元の愛、神の愛を頂いたわけです。それは敵をも隣人に変えてしまう愛であります。不可能を可能にする愛です。あなたはイエス・キリストを殺した殺人犯です。それなのにひとり子を殺された父なる神は、あなたを愛して、あなたを養子として自分の子供として迎え入れてくれたのです。これほどまでに神に愛されているならば、どうしてあなたはあの人を愛さないのですか。どうして憎んだままなのですか。これがパウロの言わんとしていることです。

この後に 15 節に『もし互いにかみ合ったり、食い合ったりしているなら、お互いの間で滅ぼされてしまいます。気をつけなさい。』律法主義には愛がないと言いましたけれども、まさに律法主義は愛がないどころか、このようなことをします。「互いにかみ合ったり、食い合ったり」律法主義は常に人を裁きます。自分と同じに出来ていない人たちを見下します。なぜ私と同じにしないのか。なぜ教会で奉仕をしないのか。なぜ教会に来ないのか。なぜ聖書を毎日読まないのか。なぜクリスチャンなのにタバコを吸うのか、酒を飲むのか。そのようにして人を見下し、人を裁き、常に粗探しをします。出来ていないことばかりに、足りないところばかりに、罪のところばかりに目が止まるわけです。かみ合う、食い合う。まさに動物が共食しているようなシーンです。律法主義は、結果的に共倒れということなのです。互いにかみ合ったり食い合ったりしているならば、最後にはお互いの間で滅ぼされてしまう。律法主義の教会は必ず倒れます。律法主義の教会は必ず長続きしません。その教会員たちは互いにかみ合っています。食い合っています。最後には自滅するんです。最後にはその教会は閉鎖されます。それが律法主義の行き着くところであり、滅びます。

カルバンはこう言っています。「自分たちでお互いの破滅を企てるなら、何たる悲惨、何たる狂気だろう。同じ体なる我々がである。」と、警告を与えています。どこまでも愚かだと言っているのです。パウロは“愚かなガラテヤ人”という言葉を使っております。「このままではあなたがたは互いに噛み合い、食い合い、そして共食して共倒れすることになる。」「何たる狂気たることよ。」とカルバンは言ったわけです。もう破滅の一途しか辿らないということなのです。だからパウロはこんなに厳しい辛辣な言葉をこの手紙の中で使っているのです。それはガラテヤ人のことを愛しているからです。もし彼のことを愛していなければ、放っておけばいいのです。「好きに滅びればいい。折角私が福音を宣べ伝えてやったのに。折角私が教会を開拓してやったのに。私と違う教えに傾いて、それに迎合され従って行くなれば、それもよろしい。好きにすればいい。自滅すればよいだろう。」と、そのようにパウロは思わなかったのです。むしろ愛していればこそ、感情むき出しにして、何としても勿論救われて欲しいというのが、その裏にあるわけです。何としても立ち返って欲しいという思いが、その裏にあるわけです。この律法主義というのは、パン種のような本当に目に見えない小さなところから入ってきてしまうものであります。一見しては分かりにくいものですから、注意が必要であります。そしてこの律法主義はあなたのすべてを台無しにしてしまうものです。これまでのクリスチャン生活のすべてを台無しにしてしまいます。そして結果的にはあなたに滅びしかもたらさないということなのです。

本当はここで終わりたいのですが、時間が来てしまったので、その続きが 16 節以降です。「私は言います。御霊によって歩みなさい。そうすれば決して肉の欲望を満足させるようなことはありません。」素晴らしい処方箋、解決法がこの後続くわけです。ちょっと心苦しいですが、これ以上ちょっと時間をかけるわけにはいかないのです。次回 16 節以降、是非 15 節止まりで終わってしまうのではなくて、しっかり 16 節以降を読んでみて下さい。じゃあ、どうしたらいいのか。そのことが書いてあります。そのことをまた皆さんに次の機会に詳しくお話ししたいと思いますので、パウロはこの 5 章 6 章を通して実践的適用を私たちに求めています。今この場所であなただけはこれまで学んできたこと、今日教えられたことを自分に当てはめて、自分に適用することが出来ます。これはあの人のためのメッセージ、じゃないのです。これは私のためのメッセージである。私がこれをしっかりと把握しなければいけない。私がこれとしっかり向き合って、これに対して応答しなければならぬ。私がこうしなければいけない。律法主義からではな

くて、それが正しいことだからです。そしてこれは神が私に望まれていることだから。そして、勿論それを嫌々ながらではなくて、そうしたいという思いで自由にそれを行うということを、今皆さんに取り組んで頂きたいと思います。いつかそのうちにではなくて、即です。これもカルバンの言葉で、「**迅速に誠実に。**」それはカルバンがモットーとした言葉です。言われたことを即行で実行する。しかも誠実にです。素晴らしいモットーです。そのモットーがあったからこそ、彼は偉大な宗教改革の働きを担うことが出来たとも言えるかもしれません。すぐに、迅速に、です。そして誠実に。私たちは後で、いつか、そして不誠実にも学んだことを忘れてしまいます。来週は休みなので、今日学んだことをもしかしたら忘れてしまうかもしれません。でもあなたがもし「迅速に誠実に」ということで学んだことを即実践するならば、適用するならば、それはあなたの記憶にではなくて、あなたの心に人格に人生にしっかりと焼きつくものになると思います。同じことをずっとパウロは宣べていますけれども、テーマはとにかく“**恵み**”です。恵み、何度言っても強調し過ぎることはない大切な概念です。これから離れてはならない。これから落ちてはならない。そしてこの恵みの上に堅く立つように。そのことが、パウロがどうしても伝えなかったこと。身体に障害があっても。目が見えなくて自分で字も書けなかったわけです。それでもどうしてもガラテヤの人たちには、このことを心に明記してもらいたい。私のハートをここに込めるから、しっかりと受けとってもらいたい、ということで記したものですから、是非皆さんもそのパウロの心と、そしてそのパウロにそのような心を与えて下さった御霊なる神のそのハートを受け取って頂きたいと思います。では今日はこれで終わりたいと思います。